



訂
正
茗
川
翁
句
集
月

^ 5
6610
4



911.35
6610
4

85
6610
4



冬之部

十月也 海もあまに松葉拾
十月や子拾りよ 春 換
くれりては障子の色も汁色月
あつらひのよ中妻の雑木山

下二十

87848

<2000-396>

藁の掃へて原をたけり言ふは
杉板のあつらひ紀の山原まで
なつたけ鶴のあつらひは

日もあつたやうそまの稲を
羽をまわす梢のきりぎりす
けりて雪路の音なりゆけり
そりてくれりや沙竜も霧煙り
偉しきけりお葉のこゝろのまへ

さうりてくれまはるゑまへ波はる
草平の境のたけなげを介れ
稲垣のいんちりともりてくれ
おあつたけ水のいんちり
一七草の鶴もくまへはつた
あつたのいんちりあけても
あつたのいんちりあけても
あつたのいんちりあけても
あつたのいんちりあけても

ひと岬とけけりてあつた

一志くまきする所す常々山の稚子
拙りやまのりりやうけあふしれれ
名葉の跡る甲斐ある志くれり
志くまきや常す細お川曲ひ
時よりやもえくくつる芥の敷
しるまれば出るまもして五位の巻
捨啼もあてまはれは流方り
下常を志くまきまらよ塔塔り

芥の香とく知てそのしるまか
泉涌きを静てをくもつ時ぬれ
志くまきや一隅くあく池の氷
まが板の音時めまうしれり
橋の扉を板の張ふ志くまきり

二見よそ二句

此と歌の時ふれ色もあまたし
ゆきうのうとくせんそんのかしれ

菰忌年三月のけり菰の昔
を思ひ出せ

米山のふち道由のむらりれ

菰忌

月時取とるを危の今式くれ
りやけの氷と来る之時取の楯
赤らその志ふを河あゝ云式は
掃よせし木の葉の塚とる思

赤云式多保の十取の障のよ
赤仙やまゝ禁年一のよ向草
木急ふ取をオムくまやを菰の日
そのたぬ月也枯時をてと斗
何れとる此中徳の上の本のもぶ

旧津の菰忌年

安濃のよとる木の葉のきむぬの日
菰仲ちとる

此と志をいれ擲をせめくるとかんる斗

翁の日記ありて

翁の侍者の物とておれりて花酒

去年の公相忌とて未毎の千會

今春の習俗千常をとりて

十たのりて樹年おく今武山

舟つらりては常系あつる十お系

をすもりてや木の葉れあつる葉子

をくくと樹の傍見えぬ木のて

まゝ宿ち千ゆゑる月夜この葉子

次くこの木の葉なりて千守りれ

くくこの思ふを侍て

木のすゝたけり出しては木の葉子

お中まをを侍えりてを侍

尾のおもひを侍のよ

たけりさくゆりてりて葉友木のて

時め以てある也 栳持の栳 土臺
より外 あり脊中のぬれ栳持の
尾際のごちて日の入る栳の栳
折節 一さうもなる也 栳持の栳
一石を碎く人まわさう身持の
栳の尾も一寸ち出素る栳の栳
は 戸より

ちのしりの中まもは戸のタリ

さし 一さきををれきて一栳尾の
若くして浮世をを 一尾の尾
いと林栳のさき 一尾の本立
小妻の尾は長竿なるに杖
をぬけてを起あさうは栳
をぬけてを起あさうは栳
いと林栳のさき 一尾の本立
小妻の尾は長竿なるに杖
をぬけてを起あさうは栳
をぬけてを起あさうは栳

幸し若草を搦て赤くする葉のみを
さしほくくぬいもすし沈むる
影のき月夜もるる石蔵の花
あやあやのちうふんえすし輝む
又う代の杉丸流ぬそ 牡母

公米の寝殿すし持りらるとき
予のゆき恒振やその落付臺
あ仙の若あふしき月夜う乳

あ仙の脊戸の月夜の水はま
水仙やう同の子まき日のも
あ仙お田へり 水の中る垣根
山紫の花を接とましくし草下枕
碧くぬくつ山紫を折すかき
沢尻の文もくすあそく納豆汁
道坂を雪踏て、午や垣子障
初冬の松風吹て冬をくす

終はいつく速くもあて冬こもり
はくも一まはりであら火桶を
冬に孔千官は語り冬にの備
上事とよみく人多き席に衣
紙念梅千中くのあるを
炭火電くはくくく夕鶴
すみの香く束の心を留ま
岩まきのそくや歳世の終り

丹浮の内宮まで

猶も一茨の中の日れたる

腰越りて

寺くまへてあやを揺るさくはれ
さくさくや儀のふ松の穂も
あつると同くく神の丸太り
水多れ羽千もつけぬよ二日月

越中の玉布勢の海千一歩を

こゝにて

あなをよもそのいひ顔の布替の海
朝くまかそくく池乃小鴨を
夕雲のてらと森松のたつ鴨
汲水の波ををけり小鴨を
夜鴨はあそびを平清の日和来
す、鴨や日くれさるゝの時の星を
何処のゝ出づ来て無ふ小鴨を

糸川よひこゝて赤一鴨の足
あすのゝの心つひや成る 飛
あゝ海や別り子なるのあゝ田
松のこゝ平乃の竹乃の松ちとら
西乃月子島あそびをよはれあは
まゝ明子こゝあゝ見あそびを
川上よを柳もあそびを啼あそ
まゝはあそびをよはれ川
柳

波平一合月入て飛巻に乳手なる
あふ磯之流泉は河より清なり
る立ふんて常河の磯の子ら乳
常一と此へ入るえす成る川あはる
清と走りりてらり船の磯り船
ひやの磯をふらるのよる岬のま
まの磯の後より

あふゆけのま磯をまれり飛巻
あふ小長来り大程急なりゆき
ぬさるものいふふしとて入る
まのまの月平花よこ人の
れつる一と

あふ平入るものまを春まの磯りか
ま又つてひ屋振くけりりりまきお
清は清なり日るは処なり居て介務
細紋雪々るれい子もある男

〇

三十一

とくくくく旭平ゆき網代
網代雪うきうきの歌へり
暎揺れた木うきまぬれり網代雪
戸口町の芦の浪もやまきの月
はあつし人の居るれうき月
上加えくふと集りたまきまき
けあつしうきまきあつしあつし
あつしあつしあつしあつしあつし

つうつうとせせせせれりうきあつし
里の灯もあつしあつしあつし
あつしあつしあつしあつしあつし
あつしあつしあつしあつしあつし
あつしあつしあつしあつしあつし
あつしあつしあつしあつしあつし
あつしあつしあつしあつしあつし
あつしあつしあつしあつしあつし
あつしあつしあつしあつしあつし
あつしあつしあつしあつしあつし

あつし

ふつふつと出る山雲ははたの雪
多れ道をもりまゝの雪は山
鳥出まゝ鳥出す雪の隣り
芦千舟雪ふんふんははた
何となくゆるさるひや雪のく
やあやうそ一枝ちりぬはは雪
雪ふれ舟世百のよぬぬの南
ゆたをくぬ田千くく松の乳

松の雪を休むる麦の雪は田く
と雪流き持ち雪ふる雪の里
大雪とふりりははたはた
木つきの一雪の雪は木はた
雪ふれやふりり先ははた
月ふりて二日千はた雪は
雪ふれ来り神千月はた竹の雪

接する

憐れにぬきをしめる力ありけ

昨鶏直るを

かく憐れにぬきをしめる力ありけ

越后妙法寺

祖根のつとめとて此書の目録

是比後脱筆

大雪の降るといふを予浦のま

西宮の冬ふくひ吉竹を物

細呂木の算をさあつと

雪あたるやゆきをさあつと

又る日より雪の形ひやと

すれ今や極とすれり

相の美れあをきとあけり

五ふらふぬや雲の細乃

掬の末れを予浦のゆき

辛酉之秋のしもきうぬはての暮
雪月の如く夜も静かしの小窓に
雪のやうに折たゆとありき梅
あすの春は月も明らんとあれ梅
あはれの長は秋の暮も歎とけ
後計也とて雪月枯枝の月は志
遠かりのゆとなく雪は静をさ
うすし雪はけりさう出さう静かな

指さす指の音は静たきまの
すく掃やをさして静かぬ地の音
田の中を雑子つくりて年の暮
秋のそよひと息つくと風のそよ
横波富子を阪の山とのけし
をさきこし

けし年の暮は静かぬ阪の山
大年之風情の出来る日暮り方

おし来りて灯て見る除夜の極小

雑之部

掃ちや房の文珠のまらる
隙はくちを流るるはんえすふ
あーさるるぬ甲のけりふこの山

追か

仔細に玉月之舞の
舞地り對しけり
ををハる故人を
ふあーとんちとあり
子やほえ侍りて

何れ来りてハる極小のむ

書 林

同 大匠心齋橋筋博勞町角	同 大匠心齋橋通本町角	同 芝神明前	同 大傳馬町貳丁目	同 下谷御成道	同 本石町十軒店	同 四日市	同 貳丁目	同 貳丁目	同 貳丁目	同 四日市	同 本石町十軒店	同 下谷御成道	同 大傳馬町貳丁目	同 芝神明前	同 大匠心齋橋通本町角	同 大匠心齋橋筋博勞町角	
河内屋茂兵衛	河内屋藤兵衛	岡田屋嘉七	丁子屋平兵衛	英文藏	英大助	山城屋政吉	須原屋新兵衛	山城屋佐兵衛	須原屋茂兵衛	河内屋藤四郎	須原屋茂兵衛	山城屋佐兵衛	須原屋新兵衛	英文藏	英大助	山城屋政吉	須原屋茂兵衛

京都寺町通佛光寺
江戸日本橋通壹丁目
同 貳丁目
同 貳丁目
同 四日市
同 本石町十軒店
同 下谷御成道
同 大傳馬町貳丁目
同 芝神明前
同 大匠心齋橋通本町角
同 大匠心齋橋筋博勞町角

